

曲線材の変形の基礎方程式

大阪大学工学部 正負 安宅 勝
同上 ○正負 波田 凱夫

本年度の年次講演会において、軸線が任意の空間曲線をなす曲線材の変形に関する一般式について述べたが、これを円弧曲線梁の微小変位理論の場合に適用して、任意の荷重を受ける曲線梁の、任意の変形に関する基礎式を得たものである。ここでは、曲線材の中立軸の幾何学的な曲率半径というものにとりわけ、変形の幾何学的な量（曲率、ねじれ率等）はすべて、部材断面の弾性主軸に関連した量として与えられている。

図1で、 s は軸線の接線方向の座標軸、 η はこれと垂直な面内の弾性主軸方向の座標軸（ s, η, z は右手系）とし、それぞれの変位成分を u, v, w とする。また s 軸は、軸線 AB の幾何学的な主法線 OS と α なる角をなすものとする。ここで s, η, z に単位ベクトル $\hat{e}_s, \hat{e}_\eta, \hat{e}_z$ をとり、 $\hat{e}_z$ が η 軸まわりに、左ねじ回転方向にまわるとき、この回転角の変化率（ η 軸まわりの曲率という） K_η 、および、 s 軸まわりの曲率 K_s は、ベクトル解析により次式で表はされる。（これを曲率 K_0 の s, η 成分とよぶ。）

$$K_s = -\hat{e}_z \cdot \hat{j}_0' = K_0 \sin \alpha, \quad K_\eta = -\hat{e}_s \cdot \hat{e}_z' = K_0 \cos \alpha \quad ('は d/ds とあらわす。) \quad (1)$$

つぎに、この部材が任意の荷重を受け変形した時の状態を考える。単位ベクトル $\hat{e}_s, \hat{e}_\eta, \hat{e}_z$ が、変位後、 $\hat{e}_s', \hat{e}_\eta', \hat{e}_z'$ になつたとする。このとき、曲率の s, η 成分および z 成分（いわゆるねじれ率）は次式で表はされる。

$$\left. \begin{aligned} K_s &= \hat{e}_s' \cdot \hat{e}_z' = K_{s0} + K_{s0}\beta - v'' + K_{s0}w', & K_\eta &= \hat{e}_\eta' \cdot \hat{e}_z' = K_{\eta0} - K_{\eta0}\beta + u'' + K_{\eta0}w' \\ K_z &= \hat{e}_z' \cdot \hat{e}_\eta' = \beta' + K_{s0}u' + K_{\eta0}v' \end{aligned} \right\} * \quad (2)$$

('は d/ds とあらわす。)

これらがいわゆる曲線材の変形後の曲率およびねじれ率である。また、その他の幾何学量として、軸線の伸び ε と、接線ベクトルの回転角成分 $\hat{e}_s \cdot \hat{e}_0, \hat{e}_\eta \cdot \hat{e}_0$ が次のように得られる。

$$\varepsilon = w' - uK_{\eta0} + vK_{s0}, \quad \hat{e}_s \cdot \hat{e}_0 = u' + vK_{\eta0}, \quad \hat{e}_\eta \cdot \hat{e}_0 = v' - uK_{s0} \quad (3)$$

つぎに、釣合方程式として、Kirchhoff-Clebschの式^(*)において微小変位を仮定すれば、

$$\left. \begin{aligned} Q_s' + Q_s K_{\eta0} + q_s &= 0, & Q_\eta' - Q_s K_{s0} + q_\eta &= 0, & Q_z' - Q_s K_{\eta0} + Q_\eta K_{s0} + q_z &= 0 \\ M_s' + M_s K_{\eta0} - Q_\eta + m_s &= 0, & M_\eta' - M_s K_{s0} + Q_s + m_\eta &= 0, & M_z' - M_s K_{\eta0} + M_\eta K_{s0} + m_z &= 0 \end{aligned} \right\} \quad (4)$$

ここに、 Q_s etc. は s etc. 方向のせん断力及軸力、 M_s etc. は s etc. 軸を右ねじ方向にねじるモーメント（従って M_s, M_η は曲げ、 M_z はねじり） q_s etc. は s etc. 方向の分布荷重、 m_s etc. は s etc. 軸をねじる方向に働く分布モーメント荷重である。

さらに、せん断中心 M の座標を (x_M, y_M) とすると、 M_s, M_η, M_z は次式で与えられる。

(*) 年次講演会草稿では、さらに一般的に表はされている。 (※) Love; Mathematical Theory of Elasticity Chapt. XVII

$$\left. \begin{aligned} M_3 &= EJ_x(K_{70}\beta - v''_H + K_{30}w'_H), \quad M_7 = EJ_y(-K_{30}\beta + u''_H + K_{70}w'_H) \\ M_3 &= GI(\beta' + K_{30}u'_H + K_{70}v'_H) - EC_w(\beta'' + K_{30}u''_H + K_{70}v''_H) - Q_3y_H + Q_7x_H \end{aligned} \right\} \quad (5)$$

これより、 u, v, w は M の変位量である。 $u_H = u - y_H\beta$, $v_H = v + x_H\beta$, $w_H = w - x_H\beta_3 - y_H\beta_7$ である。
また、断面力に關しては (5) の他に、次式が成り立つ。

$$Q_3 = EFL = EF(w' - K_{70}u + K_{30}v) \quad (F \text{ は断面積}) \quad (6)$$

以上の諸式より、変位量 u, v, w, β に関する基礎方程式が次のように得られる。

w	v	u	β	荷重項
$-(EF + K_{30}^2EJ_x + K_{70}^2EJ_y)D^3$	$(K_{30}EJ_x + K_{70}y_HEJ_y)D^3$ $-K_{30}EFD$	$(K_{30}^2x_HEJ_x - K_{70}EJ_y)D^3$ $+K_{70}EFD$	$(K_{30}x_HEJ_x + K_{70}y_HEJ_y)D^3$ $-K_{30}K_{70}(EJ_x - EJ_y)D$	$q_3 + K_{30}m_3 + K_{70}m_7$
$(K_{30}EJ_x + K_{70}y_HEJ_y)D^3$ $-K_{30}EFD$	$-(K_{30}^2EC_w + EJ_x + K_{70}^2y_HEJ_y)D^3$ $+K_{70}^2GID^2 - K_{30}^2EF$	$-(K_{30}K_{70}EC_w + K_{30}x_HEJ_x$ $-K_{70}y_HEJ_y)D^3 + K_{30}K_{70}GID^2$ $-K_{30}K_{70}EF$	$-(K_{30}EC_w + x_HEJ_x + K_{70}y_HEJ_y)D^3$ $+K_{30}(GI + EJ_x - K_{30}y_HEJ_y)D^2$	$-m_3' - q_7 - K_{70}y_Hm_7'$
$(K_{30}^2x_HEJ_x - K_{70}EJ_y)D^3$ $+K_{70}EFD$	$-(K_{30}K_{70}EC_w + K_{30}x_HEJ_x$ $+K_{70}y_HEJ_y)D^3 + K_{30}K_{70}GID^2$ $-K_{30}K_{70}EF$	$-(K_{30}^2EC_w + K_{30}^2x_H^2EJ_x + EJ_y)D^3$ $+K_{30}^2GID^2 - K_{70}^2EF$	$-(K_{30}EC_w + K_{30}^2x_H^2EJ_x - y_HEJ_y)D^3$ $+K_{30}(GI + K_{30}x_HEJ_x + EJ_y)D^2$	$m_3' + q_3 - K_{30}x_Hm_3'$
$(K_{30}x_HEJ_x + K_{70}y_HEJ_y)D^3$ $-K_{30}K_{70}(EJ_x - EJ_y)D$	$-(K_{30}EC_w + x_HEJ_x + K_{70}y_HEJ_y)D^3$ $+K_{30}(GI + EJ_x - K_{30}y_HEJ_y)D^2$	$-(K_{30}EC_w + K_{30}x_H^2EJ_x - y_HEJ_y)D^3$ $+K_{30}(GI + K_{30}x_HEJ_x + EJ_y)D^2$	$-(EC_w + x_H^2EJ_x + y_H^2EJ_y)D^3 + (GI +$ $2K_{30}x_HEJ_x - 2K_{70}y_HEJ_y)D^2$ $-(K_{30}^2EJ_x + K_{70}^2EJ_y)$	$-m_3 - x_Hm_3' - y_Hm_7'$ $(D = d/ds) \quad (7)$

これが一般の場合の基礎方程式である。

特殊の場合として、部材の断面形が η 軸に關して対称な、かつ、 η 軸が、変形前の軸線の主法線と一致する場合に於ては、変位 v と w は、 u と β に無関係に生じ、上式は次の二群に分れる。即ち、 $\alpha = \pi/2$ とするときは、 $K_{70} = 0$, $K_{30} = K_0 = 1/R$, $x_H = 0$ から

$$\left. \begin{aligned} -(EF + K_0^2EJ_x)w'' + K_0EJ_xv'' - K_0EFv' &= q_3 + K_0m_3 \\ K_0EJ_xw'' - K_0EFw - EJ_xv'' - K_0^2EFv &= -m_3' - q_7 \end{aligned} \right\} \quad (8a)$$

$$\left. \begin{aligned} -(K_0^2EC_w + EJ_x)u'' + K_0GIu'' - (K_0EC_w - y_HEJ_y)\beta'' + K_0(GI + EJ_y)\beta'' &= m_7' - q_3 \\ -(K_0EC_w - y_HEJ_y)u'' + K_0(GI + EJ_y)u'' - (EC_w + y_H^2EJ_y)\beta'' + (GI - 2K_0y_HEJ_y)\beta'' - K_0^2EJ_y\beta &= -m_3 - y_Hm_7' \end{aligned} \right\} \quad (8b)$$

(8a) はいわゆる曲率面内の変位、(8b) は曲率面外への変形を表はすものである。右辺の荷重項はもちろん、前者で、曲率面内に働く荷重、後者で、面外へのそれを表わす。

さらに、中立軸の軸方向の伸縮は微小であると仮定するときには (3) において $\varepsilon = 0$ とし、(7) における未知量 w, v のうちのいずれか一つを消去する事ができる。この場合の基礎式は断面の都合で割愛するが、この場合にもまた、 η 軸が対称軸な、かつ、軸線の主法線と一致するときは、基礎式は面内及び面外への変形を表はす二群に分れる。すなわち、面内変位に關して、

$$-EJ_x(v'' + 2K_0^2v'' + K_0^2v') = -m_3' - K_0m_3' - q_7' - K_0q_3 \quad (9)$$

が得られ、一方向外変位に關しては (8b) と同形の式を得る。

なお、一軸対称断面において、 $\alpha = 0$ とするときには、(8), (9) の式において、 u と v が入れかわり、 u が面内変位、 v が面外変位を表わすことになる。